

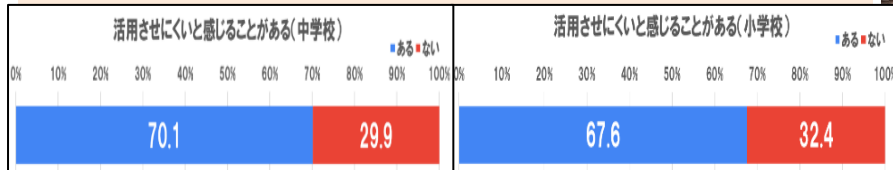


☆この広報紙は、学校に関する東広島市教育委員会の施策や事業、各学校の取組などを皆様に知っていただきたいとの思いから作成しています☆

電子黒板からタブレットまで、ICTの授業活用なら何でもサポート

市内を駆けめぐるICT支援員

ICT 支援員とは…一人一台端末や電子黒板といった情報機器の教育利用を促進するために、学校支援センターから各学校を訪問して技術支援を行います。元教員の4名が活動しています。



このグラフは、昨年度末、小中学校の教員に「授業でタブレットを活用させにくいことがあると感じることがあるか」と尋ねた回答で、ほぼ7割の教員がそう感じていることがわかりました。

各学年の授業に密着。2週間連続サポート・原小学校

原小学校は、年度初めの5月に2週間 ICT 支援員による集中的なサポートを受けました。「先生たちは、これでいいのかと迷いながら、機器を使っていたので、専門的な方に見てもらいたかったし、様々な使い方も学びつつ、学校全体で ICT による授業を工夫しようという雰囲気を作りたかった。」一中野詠美子校長はそう語ります。下の表は、その主な内容。

学年	授業でのサポート内容 ★技術指導と相談 5月13日～27日
3 学年	百マス計算エクセル、グーグルスライド、Word 貼り付け (14 日) 国語・Word のワークシート学習 (15 日) Word でカード作成 (23・24 日)
4 学年	算数・折れ線グラフ (13 日) デジタルコンテンツ活用、総合 Google スライドでテキストや表の挿入、画像貼り付け方法 (16 日) 国語・生き物図鑑作成のポイントを見学が探す (21 日) 国語・「ヤドカリとイソギンチャク」デジタル教科書で全文通読、段落分け。段落要約用スプレッドシートについて (22 日) 総合・調べた内容を Google スライドで作成 (23 日) 国語・「ヤドカリとー」段落分け (24 日) デジタル教科書活用 (27 日)
5 学年	社会・「低い土地の暮らし」スライド資料説明、ジャムボード共同作業 (23 日)
6 学年	★Google スライドへの背景貼り付け「ふきだし君」紹介 (14 日)、 ★Google サイトを使っでの意見交流の仕方 (16 日) 社会・Google スライド政治の仕組みと選挙、★TfabcTile 設定 (21,22 日)
全体	★朝のスキルタイムでスキル向上 (23 日) ★ドリルパーク活用 (24 日)

4 年生担任の脇教諭 (左) と
6 年生担任の得能教諭 (右)

中心になって支援した村田 ICT 支援員は次のように話しています。

「原小学校の先生方は、はじめは思ったような結果が得られない事もありましたが、アプリの特性や活用例を紹介すると次々に新しいアイデアで活用法を広げておられました。サポートする私達の方が逆に学んだ事が多かったと思います。一般的に、ICT 活用について話すと、何から始めていいかわからないと言う先生がおられます。アプリの特性や活用例を紹介するとアイデアとやる気がわいてくるようです。そのようにサポートしていきたいですね。」

●脇教諭-ICT はある程度活用してきたが、国語科でどう活用するかという課題があった。サポートによってスプレッドシートの使い方がよく分かった。以来、大きく変わったことは「紙が減った！」ということ。これまで印刷したワークシートに記入してノートに貼っていたのが、授業中でも教師が作ってタブレットにすぐ送ることができる。

●得能教諭-Word・Excel・PowerPoint は使っていたが、今回のサポートでより使い勝手の良い Google スライドを授業で活用できるようになった。タイピングが苦手な紙の方がいいと言っていた子も慣れてきた。教師も児童も、使ってみようかとチャレンジした時には壁があるが、その時にすぐサポートが受けられた。何日間か集中してサポートを受けられる環境がありがたかった。



村田真司 ICT 支援員



4 人の ICT 支援員 (左から、田中・村田・大岡・信廣)



理科の自由進度学習。顕微鏡コーナーで学ぶ3年生。

全員が苦手意識や使いづらさを乗り越えて・黒瀬中学校

黒瀬中学校は、夏休み直前の2週間、4人の支援員が授業を参観し、何が ICT 活用の壁になっているのか教職員の声も聴いて支援計画をつくりました。不安感の高かった Google ワークスペースの活用について、右の表のような内容で夏休みまる1日の研修を2回行いました(上の写真はそその一コマ)。

また、2回の研修後、初めての試みとして盆明け、生徒の様子を把握するために、生徒指導部の声掛けでオンラインによる面談を実施しました。教員間では「部活動で会っているのに」という声もありましたが、おとなしくて集団の中ではあまり意見を出しにくい生徒とも1対1で話す中で、いろんな思いも聞けてよかったとのこと。

●前崎教諭(数学・左) … 2日間全項目を研修して、Google の仕組みがよくわかり、夏休み明けからフォームでアンケートするなど、授業でいろいろ活用できるようになった。Google スライドを使って、授業の内容を休んだ生徒に紹介することができて有効だと感じた。また、面倒だった数式入力も手書き入力ツールを入れてもらったので楽になった。

●宮本教諭(美術・右) … 美術では鑑賞や作品紹介に Google スライドを活用するようになった。サイト上では他クラスの生徒の作品も鑑賞できるし、自分にあった資料を見ることができる。3年生の学習では絵や粘土、貼り絵等で自画像を表現しているが、様々な表現方法も Google サイトにのせておけばいつでも参考にできる。



ICT活用で、初の単元内自由進度学習(理科)

3年生の理科で単元内自由進度学習を夏休みを挟んで実施しています(単元とは教材のまとまりの事)。単元名は「生命の連続性」。細胞分裂から生殖、遺伝などの内容を13時間で学びます。担当の田邊秀之教諭が作成した24ページのワークシートを活用しながら、教科書やタブレットでウェブ上の教材も活用して、生徒が個々に学習を進めます。ポイントごとに難易度別3段階のミニチェックテストも用意され、自由にチャレンジできます。

初めは少し戸惑いがちだった生徒たちも、夏休み明けに再開した学習では、タブレットで動画の視聴や学習の足跡の記録など自在に活用し、用意された顕微鏡での観察や発展学習コーナーも使って生き生きと学習していました。

3年生の伊川さんは「自分の思いに合わせて進めていくことができる。プリントも自由に選んで何回でも復習できる。こうした学習は好きです。」と話していました。

鈴木晶雄校長は「単元内自由進度学習を進める生徒を見て、その主体的な姿勢や協働しての学びの姿に感心した。準備は大変だが、今後何でもブラッシュアップして使える。このような授業ができたのは、教師も生徒も ICT を積極活用したから。課題を明確にしながら、多様な学びの可能性を校内で広めていきたい。」と、今後の ICT 活用の授業に期待していました。



●田邊教諭(理科)

教師も生徒も、単元内自由進度学習に初めて取り組んだ。単元の構想や準備に時間はかかったが、実際に授業を進めると、細かい指示をしなくても、思った以上に生徒は自分たちで授業を進めた。その進め方も多様で、生徒にはそれぞれ適した理解の仕方があるのだと改めて感じた。

ICT、こうして活用してください。ICT支援員からのアドバイス

アイデア1 ミライシード(ドリルパーク)活用術

① 学校での活用…授業の前後での短時間ドリル学習と自主学習に活用。個別学習前提に問題がプログラムされているので、ちょっとした空き時間にも活用できます。一人一人の進捗もかつては教室内掲示でシールなど貼っていましたが、自分の進捗は自分と教師以外にわかることはありません。各教科の問題数も多く、学年を超えてのチャレンジも可能です。

② 家庭での活用…宿題として先生から配信された範囲で学習できますが、やはり大事なのは自主学習として活用することです。ただ、本人がタブレットに向かっていても、学習している内容は保護者が把握する必要があります。各家庭でお子様と約束を決めておくよと思います。

アイデア2 常に机の中にタブレットを

授業で活用しようとしても、その時に初めて充電庫から取り出してきたのでは、「稼働に時間がかかって使いにくい」というのが、現場での一番の問題のようです。とくに学級担任がいつも教室にいないわけではない中学校でこの傾向があります。とにかく「朝来たら、充電されているタブレットを電源を入れ、机の中に入れておく」ことです。定規や鉛筆などの文房具はいつもそうしておきますよね。小学校からの習慣が見についているはずですから、中学校でも継続すべきです。朝の健康観察や予定確認などをタブレットで毎日行うことでこうした習慣はすぐに身に付きます。



信廣正夫 ICT 支援員

ドリルパークとは子ども1人1人が習熟度に合わせた問題に取り組むことができるオンライン上のデジタルドリルです。子どもたちのタブレットでなら、家庭でも学校でも使用できます。学年・教科を問わず、多くの問題があり、その解答状況を AI が判断し、個別に子どもたちに最適な問題を選択して提示します。丁寧な解説があり、自動採点で繰り返し取り組みます。

■TOPIX■

黒瀬中学校区 B チームが初優勝

8月3日、空調新設を含め大規模改修なった西条中学校体育館で、第18回教職員スポーツ交流大会が開催され、市内各小中学校の教職員が中学校区ごとのチームに分かれ、室内スポーツで交流しました。18チーム、240人が参加。決勝戦は黒瀬中学校区 B と磯松中学校区 B の間で争われ、黒瀬中学校区 B チームが初優勝しました。下の写真は、優勝が決まった瞬間の黒瀬中学校区 B チーム





どうしようは、行動しよう ―悩んだら とりあえず行動する―藤原 孝（ふじわらたかし）教諭（中黒瀬小学校）

- ① 教員になろうと思った理由…建築関係に進もうと思っていた。大学であったワークショップ等で、子供たちと関わることがあった。「やった。できた。」と満面の笑みで取り組む姿を見るうちに、子供に携わる仕事がしたいと思うようになり、小学校の教員をめざした。
- ② 趣味・気分転換…メダカを飼う事。メダカは、同じ種類・柄の子は出てこない。様々なメダカが泳いでいるのを見ているだけで幸せ。
- ③ 小学生の頃の思い出…野外活動は、砂丘で行った。（鳥取県出身）キャンプファイヤーのスタンプは自分が演出した「プレーメンの音楽隊」。拍手喝采であった。

呉市から東広島市へ転勤してきました。春4月。子供たちが基準服で登校する姿が新鮮に映りました。そして、地域・保護者の方による登下校の見守り体制にも驚きました。前任校同様、職員室の雰囲気はとても良いです。毎日、元気な5年生と学習したり運動したりして、笑顔で過ごしています。ただ、2学期制に慣れるのには、少し時間がかかりました。

当面の目標としては、ミドルリーダーから次のリーダーへと成長していくことです。その過程において、自分の考えをしっかりと持ち、そして発信できる人になりたいと思っています。何事もやらずに後悔するより、やって後悔した方がよいと思っています。万事、ポジティブに考え、精進していきたいと思っています。



“Just Do It！” ―やってみなければ分からない― 林 碧（はやしひどり）教諭（高屋中学校）



本市の生徒は、小学校から「東広島スタンダード」がしっかり定着し、当たり前前のことが当たり前前にできて、きちんとしていると感じます。ICTの活用も進んでいます。また、生徒は部活動も頑張っており、私が顧問を務める陸上部も中国・全国大会に出場しました。生徒の中には、失敗を恐れて、チャレンジしないところもあるので、「やってみなければ分からないから、とにかくやってみる」ことを意識させたいです。自分の夢でもあります。英語を通してコミュニケーション能力を高め、世界に羽ばたく（世界で活躍できる）人を育てたいと思っています。

- ① 教員になろうと思った理由…中学校の時の担任の社会科の先生が、とても面白かったからあこがれた。また、海外ドラマや映画を見るのが好きで、「何と言ってるの」と尋ねられた時、それを教える経験が楽しいと思ったから。
- ② 最近大笑いしたこと…部活動で、ハードルと一緒に練習していた時、生徒に注意していた場所で転んで、足をねん挫したこと。
- ③ 小学生の頃の思い出…担任の先生がとてもパワフルで面白く楽しかった。卒業式で卒業が嫌で大泣きをした。今思えば先生との信頼関係があったと思う。

「ピンチはチャンス」―なんとかなる、なんとかしよう― 高瀬愛美（たかせあみ）主事（板城小学校）

- ① 学校事務職員になろうと思った理由…東広島市で学び育つ中で教育に関心を持ち、大学では教育行政について学んだ。行政職員の立場から先生方や子供たちを支援し、学校教育をしっかり支える一員になりたいと思ったから。
- ② 趣味…ミニシアターでの映画鑑賞。旅の計画に組み込むようにしている。先日は高知県へ行ってきた。これから中四国を中心にいろいろな所へ心がちよっとほっこりするような映画を見に行きたい。

小学校時代が一番の思い出は朝マラソンです。明石まで行くことを目指してシールを貼ることを励みに頑張りました。おかげで走ることが好きになり、中学から高校大学まで陸上を続けることができました。また母によく言われた『ピンチはチャンス』という言葉大切にしています。たとえばうまくいかない時があってもアドバイスに耳を傾け自分で努力や工夫をし、やればできるとポジティブに考えられるようになりました。生まれ育った東広島市の学校で勤務するようになり、自分が教えていただいた先生と一緒に働いているのは不思議な感じですが、周りの皆さんの助けもあり絶対に頑張ろうという気持ちでいます。今後は、自分の仕事を通して業務改善などで周りをサポートしていけるようになりたいと思います。



進んで学ぶ、仲間と学ぶ 自主研究サークル紹介

読み語りサークル

第3回

～この本大好きな会

「この本大好きな会」は、40年近く前から全国86か所で活動しています。東広島支部ができたのは1991年。3人でスタートした当時からのメンバーで元小学校長の長沼正夫さんが、現在の東広島支部の代表。会費はもちろん無料。

月1回の活動内容は、参加者が読み語りをした絵本を紹介しあうことが中心。

顧問で活動場所を提供している（株）アスクライブラリーの朝川照雄さんは、広島県内で読み語り歴46年。200以上の幼稚園・小中学校で読み語りを実施。その功績が認められ、令和3年広島県教育賞を受賞されました。

代表の長沼正夫さんは、「『いつでもどこでもだれでも読み語り』を合言葉に活動しています。ぜひ参加して、絵本の読み語りを聴いたり、おしゃべりをしたりして、楽しいひと時を過ごしてみませんか」と話しています。



サークルデータ

・設立
1991年ごろ
・所属人数
15名程度
・月1回・土曜日
10～12時
・会場 アスクライブラリー・絵本の部屋
代表者 長沼正夫

リレーコラム「私の出会った子どもたち、先生たち」

今回は前回の小林先生からご紹介いただいた太田美鈴先生。

第18回



子どもとして、教師として成長した母校での思い出

【私の小学校時代】

私は昭和34年4月に西条小学校御菌宇分教場に入學した。ちょうど西条・下見・御菌宇・吉土実小学校の4校が西条小学校に合併した年であったと記憶している。3年間分教場で小学校生活を送り、4年生から現在の山の上の西条小学校に通うようになった。

小さな学校から学年4学級もある大規模校に通学する変化は大きかった。まず4km以上もある通学距離をバス通学することは大変な思いもあったが楽しくもあった。できたばかりの学校なので、環境はまだ整っていなかった。例えば西条坂も御菌宇坂も雨の日のぬかるみはひどく、歩きにくかった。しかし、この坂道の片側に桜の木を植える作業して世話をする中で、小さな苗木が大きくなり、6年生の頃には2、3輪咲いた桜の花を見ながら登校するのが嬉しかったことを覚えている。

この西条小学校の先生方を思い出すと、その思い出は教師となった私の背筋をピンと伸ばしてくれる。今は亡き先生方も多いが、私の心の中では生きておられる。朝登校するといつも一輪車を押して土を運び芝生を植えたり、運動場を平らにしたりと作業をしておられた下崎実校長先生。朝礼台の上での話は、具体的な心に響くお話で引き込まれた。例えば「私は大家族ですが、必ず全員で揃って朝ご飯を食べます。みんなの顔を見ながら食べると、とてもおいしいです」ということ等、小学生の私にはとても新鮮だった。

毎週水曜日の音楽朝会、全校児童千人近い人数が講堂に集まり、玉津正幸先生の楽しい指導で全校合唱やリコーダー合奏をした。日本の民謡を学年全員で合唱・合奏し、「もっと合わせて」、「さらに美しく」と厳しく指導されたことも最近の事のように思い出される。

行間体育では西原忠徳先生が体を鍛える運動を教えてくださいました。学年体育では持久走に取り組んだ。西条坂から石ケ瀬の川沿いを走り、下見坂を登っていく頃にはしんどさしか感じなかった。校庭に着くと「よく頑張った」と西原先生の声に安堵感を覚えたものだ。

担任は、新しく先生になられた上田靖先生で、算数の授業研究を熱心にされてたくさん先生方が授業を参観に来られた。授業をされる先生がとても緊張されていて、汗をかきながら教えて下さっていた。子どもの私たちは上田先生が大好きで、先生を助けようと、頑張って発表したことを思い出す。

思い出すときがないほど小学校での様々な出来事が溢れてきて、お世話になった先生との思い出も次々と浮かんでくる。また、西条小学校のこの頃からの行事や研修体制が今も伝統として引き継がれていることを卒業生として誇りに思う。



太田 美鈴 先生

S50.8
黒瀬町立中黒瀬小学校 教諭
S56.4
東広島市立三永小学校 教諭
S62.4
東広島市立西条小学校 教諭
H9.4
東広島市教育委員会 指導主事
H12.4
東広島市教育委員会 課長補佐
兼指導主事
H13.4
東広島市教育委員会 指導課長
H16.4
東広島市立小谷小学校 校長
H19.4
東広島市立寺西小学校 校長
H22.4
東広島市立高美が丘小学校 校長
H25.3.31 退職

篤志面接委員・保護司として活動
現在
東広島地区保護司会事務局長

【教師時代の宝物】

あまり豊かでない家庭に育った私は、親に迷惑をかけずに大学に行って自立したいと思っていた。地元の教員養成課程のある大学に入学し、奨学金を受けながら通い、卒業後小学校の教師になることができ、夢を膨らませた。

しかし、教師になってすぐに自分には指導力がないことを自覚し悩んだ。まずは授業に子どもたちを集中させること、最初の導入がうまくいけば子どもたちは課題に食いついてくれる。そう考えて授業の導入について工夫し、研究した。導入がうまくいって子どもたちが課題に熱心に取り組むととても嬉しかった。しかし、うまくいくことはめったになく、落ち着かず学習に実が入らない子どもたちがいると、自分の力不足を棚に上げて、どうしてちゃんとしないのかと注意したり、時には家庭の責任だと考えたりすることもあった。今考えると教師として本当に情けない思いである。

そんな中、私が教師生活で宝物としている経験がある。母校である西条小学校に10年間勤務した時である。特別支援学級の子どもたちの担任として2年間に3名の子どもたちと出会ったことだ。

音楽大好きで大好きな歌を聴くとにこにこ顔で歌い踊り出すA君。誰に対しても優しく接し思いやりがあるので、同学年の級友からしたわれていた。毎日教師の私が癒されていた。言葉を発することはなかったが、自分のやりたい事はしっかり持っていて、最後までやり遂げようと頑張るB君。思いを表現しにくいようだが、表情などで気持ちを教師に伝えていることが理解できるようになった。器用で作ることが好きで自分で楽しく生活し、周りの友達の気持ちを察して仲良く行動できていたC君。思いをしっかり伝えてくるのでそれに応えたいと工夫した。

3人の子どもたちとの学級生活で、私のこれまでの教師としての考え方は大きく転換した。教師は指導者であると共に、生活の支援者・介助者でもあると自覚した。また子どもの学力・体力・生活力の尺度を根本から見直さなければ、教育計画が立てられなくなった。よりきめ細やかに、ゆっくりと、丁寧にしかし大胆に自立を目指して教育内容・活動を考えていこう。先輩の取り組みなどを参考にしながら、子どもたちの持っている力を伸ばせるような手作り教材を作ったり、好きなことを取り組む中で楽しく学んでくれるように授業を工夫したりすることは、とても楽しくわくわくする事だった。

子どもたち一人一人を伸ばすために何をしたらよいかと考える事こそが教師の醍醐味だと感じるようになった。3名の子どもたちの出会いから、「特別支援学級の子どもたちの成長をいかに支援するか」は学校全体の共通テーマであり、それがすべての児童の成長につながるものだと思うようになった。これからも子どもたちが、意欲をもち、スモールステップでも良いので自分のできることを増やし、それを自信にしてそれぞれの夢や目標をかなえる努力ができるように、今できることで応援したい。